

記憶のある裡に

大正時代の或る子供の生活（上）

安溪芙美子

これは、母の絶筆です。一〇〇歳までは元気に生きるだろうという大方の予想を裏切って、脳腫瘍のために一九九九年に満八〇歳で亡くなりました。亡くなるに一三ヶ月前の、一九九八年一〇月二一日に書き始めて、失われていく記憶をつなぎ止めながら翌年四月ごろまでに書き終えた原稿を三回に分けて掲載します。二歳から七歳までの思い出ですが、いつも小説風ではなく、人物はすべて実名で登場します（安溪遊地）。

## 二歳三ヶ月の記憶

人は一体幾歳位からの記憶を持つのだろうか。それは勿論人夫々に依るのは当然だろうが記憶の有る無しは思い出す反復の多少によるように、私には思えてならない。

満一歳の位からの記憶を持つ人、或いは六、七歳以前の事は全く記憶にない人も、勿論いるはずだとずっと思い続けている。ところで私は大正八年七月生まれの老人だが、二歳三ヶ月の記憶が鮮明に残っている。

その部屋は可成り広く真ん中の布団の中に黒い口髭を持つ男の人が、胸の辺りにしっかりと両手を組み目を閉じたまゝ眠っている。周りには白衣をつけ大きな眼鏡をかけた男の人と白い服の女性の一人は瓶を捧げ持ち今一人は寝ている男の人の胸に手を当てゝいる。

周りに三四人いる女の人は母、姉、叔母であるのは私にも解っていた。たゞ不思議なのは、三人共大粒の涙を滾なみだしては拭き、またポロポロと涙が流れているのを、私は何とはなく変な気がした。この見知らぬ髭の小父チャマはどうして目を開けないのかなあ、何時も私をだっこしてくれる姉や、「オバチャマ」となつ

いている人も、お母さんまで泣いているのが、私には不思議でしかたがない。

「お姉さん、赤ちゃんの言葉をきいて」

叔母は涙いっぱい目で私を睨むように瞋める。姉が黒髪の小父さんに縋りつき、何か言っ  
て泣くのを母親まで大粒の涙を流すのを、私はただ黙って突っ立ったまま、一人喋りをした。

「モアカン、モアカン」といったのだそうだ。未だ言葉を話し切れない私の喋れる唯一の言葉が「モアカン」だったのだということとは十歳を過ぎてから母から聞かされて、私は申し訳ない思いで泣いた。黒髯の男の人は実は父親で臨終の間際だったとの事だった。

私を抱っこして守りをしてくれた叔母は父の末の妹だということ、後年小学校に入学した折聞かされて、子供心にも何故「もうあかん」なんて言ったのだろうと可成りの間苦にしていたように思う。

「モアカン」という赤ん坊の言葉は、大人にとつては「もうあかん、もういけない、もう駄目だ」であり詰り死を意味する言葉である。

私は極く小さい頃に、多分十ヶ月位で歩き始め、同時に訳の解からぬ言葉を呟き、モア

カンもその無意味な言葉の一つであつたらしい。

然し死に臨んでいる人の回りをもうアカンといゝ乍<sup>なが</sup>ら歩く事は、其処にいる者達には病人がもういけない、もうあかんというわけで死を意味すると思うのは当然だった。

立派な口髯をピンと跳ね上げたゞ眠り続ける人が、良くダツコしてくれた父だと理解するには私は稚な過ぎ、何時も喋り続けているアカチャとかモアカンとかブベベ等の無意味語の仲間のモアカンを、父の臨終を取り巻く母や叔母兄姉や女中達にとつては、父の最後を意味するのは当然だった。

私は女中の一人に抱き拘えられ泣き喚いて隣の部屋に寝かされワーワー泣き喚いたとの事だが勿論記憶にはない。それが私の唯一の父に関する記憶である。多分その後沢山の私たちの葬式や軍人であつた父の所属していた、十六師団の聯隊の兵や上官達の訪問とか親戚縁者の葬儀の参加等人で一杯の我家の記憶は私には全くない。後年五歳年上の兄が、墨で髯を書き「僕は聯隊長でお前よりずっと偉いんだよ」とよく威張つたが「じゃ、私も聯隊長になる」と言ってみると兄はフンと小馬鹿にした笑顔になつて「お前は女の子だ。兵

士にはなれないよ」というのに腹立ち、私だ  
ってきつと兵隊さんになるものと心に決めて  
いたが、すると目をしっかり閉じた父親のピン  
と跳ね上がる黒髯が見えたように思い、多分  
抱かれた時その髯をひっぱった記憶が蘇るの  
だろう「お父さん」と呼んで了う。兄は哀れ  
むような表情になり「馬鹿ダナー、もうとっ  
くにお墓の中で骨だけしかないよ、これから  
は僕がお前のお父さんの代りになるんだよ」  
と墨で髯を描き、「どうだ、お父さんみたいだ  
ろ」と威張ってみせる。

「大分違うけど、まあいいよ、おにいちちゃんのお父さんで我慢する」

「そうか、お前は聞き分けのいい偉い子だよ」  
賞められると何となく偉くなったような気が  
して、「お兄ちゃん大好き」なんてお世辞の  
一つも言って了う他愛なさ。

### 武道の達人の祖母の登場

そんな幾日か幾年かゝ過ぎ我が家にも少し  
変化が起こる。それは母方の祖母が、娘の家の  
心許なさ、小学六年生を頭に小学三年生、四  
歳の幼児のいる家庭の監督に来てくれた事だっ  
た。

ある日庭の松の枝に腰掛けていた兄がスルスルスイと来ると、陣取り遊びをしていた私の傍らに近づくのと、囁くような声で私に言った。

「芙子<sup>フーコ</sup>、お前知らないだろ、今日からお祖母さまが家の人になるんだよ」

「お祖母さまって誰？」

「お祖母さまってのはお母さんのお母さん、そしてこの人偉いんだヨ、武道の達人だってサ」

「武道の達人って何をする人？」

「馬鹿ダナーお前、ま、学校にも行かぬ年のお前にわからなくて当り前だけど、武道ってのはね、僕が僕の友達と竹の棒でよくチャンバラゴッコやってるだろ、君だって時々仲間に入ってお母さんに叱られるあれだよ」

「ふーん、でもタツジンって、お祖母さまのお名前なの」

「馬鹿ダナー、お祖母さまをお前は知らないだろが毛利家の士の娘で、小さい頃に剣道を十分に習められたって、お母さんに聞いたよ」

「????士の娘って何する人？」

「お前に言ってもわからないだろが、誰より

も強い人の事さ」

「強い人って怖い人の事？」

「ま、そんな人さ」

「そしたらもう泥棒やら来ても怖くないの？」

「ウン、お祖母さまは女でも剣道の達人だつてお母さんいわれたから、もう泥棒も押売りも家に入らないよ」

「だったらお兄ちゃんも用心棒しなくてもいいの」

「あゝ、泥棒入っても心配ないし、すると多吉も自分の家に帰れるよ」

多吉というのは女、子供ばかりの家を案じて、祖母の寄越した出入りの八百屋の丁稚さんで、まだ十代の男の子で、兄や姉の送り迎えや母の使い走りや、私のお話相手もしてくれる、私には優しいお兄ちゃんの一人だった。

「多吉ちゃん家に帰って丁うの芙ちゃんいやだあ、お婆さまより多吉ちゃんの方がいゝ」

「馬鹿ダナー、この間お母さんが押売りに攻められて難儀したこと忘れたのか？ 多吉ちゃんお廻りさん呼んでくれただけじゃないか」

「でもお婆さまって、多吉ちゃんみたいに私をオンブして下さるの？」

「そりやまあ無理だけど、押売りだとか泥棒が入っても、お婆さまは毛利の殿様に仕えた家老の末娘で、剣道の達人だよ」

「達人っても、私にわからないもん！」

「とも角、年とっていても泥棒でも強盗でも武道とか柔術、剣道とかできる偉いお婆さまだから心配いらないんだよ」

でも私にはどうもこの兄の云うことを、芯から信用を出来ないでいる。兄にはおやつを巻き上げられたり、玩具を壊されたりすることもあるので、どうも信用できないでいる。兄は余り信用できないとしても、十歳も年上の姉なら、きつと本当の事を教えてくれるだろう。

「お姉さん、もうじきお婆さまが山口からお出でになるってお兄ちゃん云うけど、そのお婆さまって、剣道が出来てお兄ちゃんなんか、絶対勝てないって本当なの？」

姉は暫く考える風に、頬杖ついていたが思い出したように、「そうね、剣道の事は知らないけど武道って行ってね、芙チャンにはまだわからないでしょうが、とても強い力で泥棒の腕ナシカすぐに振じ上げて降参させられるんですってよ」

「お姉さん見たことあるの？」



「見ていないけどお母さんがそう仰言るのだからあなたも安心しなさい、お母さんは嘘おっしゃらないでしょ」

姉にそう云われると何と無く納得出来て、一日も早くそのお婆さまがお出になればいいと思つた。

翌日の昼頃お婆さまは少し年寄つたお爺さんを供にして我家に来られた。

「そなたが末っ子のフーサンかい？」

「私末っ子じゃないの、私フーチャンって名前です」

「おゝ、そうかいの、幾つにお成りかね」

「きつと五つか六つくらいです」

「そうかいの、自分の年位はもつとしっかり覚えるものじゃ、秀子はいったい何をしているのじゃ」

「???」

いくらか叱責気味に聞こえる祖母の語調は私には少し恐ろしく感じられた。

「母上様、ようこそお越し下さいました。有難うございます」

何時の間にか私の後に立つ母の声に振り向いた私は、何がなし緊張しているような母の顔を仰ぎ見て思わず「こわい」と着物の裾に

継りついた。

「この子は人見知りをするようじゃの、よい習慣ではないのう」

「多吉に暇を出してからこの子は遊んでくれる者がいないもので、つい失礼致しました。ふうちゃん、お婆さまですよ。いい子ですネ、こんにちはの御挨拶しなさい」

「ハイ、お婆さまこんにちは」

「こんにちは、だけではいけんのじゃ、自分の名前を先に云い、それからお婆さまようこそお越しなされませ、とこういうのじゃ、わかりか」

間髪を許さないくらいか叱責の響きのある祖母の言葉にビクツとした私は、昨夜姉に幾度も教えられた言葉を思い出し坐り直して両手をつき、改めて挨拶をいう。

「お祖母さま、遠い処をようこそお出で下さいまして、有難うございます。私は末娘の芙美子でございます。これから色々お行儀のこと教えて下さいませ」

「おゝ立派に挨拶できたのう。秀子さん。この娘は父を亡くしても私の思うた程、しを垂れもせず元気そうでそなたも苦勞じゃったのう。これからは私も子供の成長に手を貸

す程にしつかりなされよ」

母はウッスラと泪を泛<sup>うか</sup>べ祖母を見上げ

「母上様、何卒これからいくへにもお導き下さい」

といゝながらも一生懸命涙が滾れないようにしていた。

何となく祖母を見上げ母に目を移すと母の頬に二筋の涙の跡が見え私は思わず、この余り見知らぬ祖母<sup>ババ</sup>さまの強い目に射すくめられ、思わず

「お祖母<sup>ババ</sup>さま、お母さんを苛めないで」

「おおそうかいのう、そなたは母を大事にする子じゃの、それはよい子の証拠じゃ」

祖母はそういうと私の頭を軽く撫でた。私は何となくうれしくて、昨夜姉に幾度も教わった言葉を思い出し乍ら二度目の挨拶を述べる。

「お婆さま今は姉も兄も学校に行っていますので、末ッ子の私がお祖母<sup>ババ</sup>さまのお手伝いします。何でもお言付け下さい」

するとニコリともしなかった祖母の表情が緩み

「おおそなたが手伝っておくれかい、それでは手水の盥に水を汲んでおくれなされ」

子供なりに先は第一関門をやり過ぎたような安堵感にホツとして、イソイソとポンプを動かし水を運んで母を見上げ一寸微笑んでみる。

母は私に小さなお盆に載る茶託をわたしながら

「滾さないようにお婆さまのお傍に持っていって頂戴ね」

「ハイ」

返事はしたものの、どこに持っていけばいいのか私にはわからない。お婆さまは白い幕の垂れ下がる仏壇の前に坐り、併せた両手には二重にも三重にも見える数珠を揉み上げるように擦っておられる。

「お婆さま芙チャンお水を持ってきたの、何処へ置くの？」

「おおそうかい滾さぬよう縁側の端にソロリと置きなされや」

私は言われたようにソロリと降ろした心算だが、何しろ可成り大量の水が入っているの、ソロリのつもりがバシヤンとなり金盥はひっくり返り水は廊下に零れ、大半は縁の外へ

流れて了った。

祖母は振返りざま立ち上がり

「だから言わぬ事じゃない、子供に持たせる  
なんて論外じゃ」

「お婆さま御免なさい」

私は素早く祖母の前に坐り両手をつき頭を  
下げて謝る。

「そなたは悪うはない。お光を呼んで来な  
さ  
れ」

「はい」

私は言われるまゝ台所にいた女中のお光を  
呼ぶ。

「お婆さまがお光を呼べと仰言つたよ」

滅多に使わない仰言つたなどと難しい言葉  
がうまく口から出て少し得意である。という  
のはその時家にいた

二人の女中さん、お光のお婆あとお兼婆あ  
が二人とも

「嬢さんとお（その頃京都では女の子を嬢さん  
と呼んでいた）どうおしやした、お婆様にチ  
ヤンと金盥お運びしたんでつしやろ」

「ウン、芙チャン置く時ガチャンと水滾し  
たの、そしたらお光を呼んできなされて言

われた」

「へエさいどすか、そらえらいこつてすな、そやけど嬢さんの故やオヘン、お光が持つて行ったらよろしうおしたのになあ、そんでお叱られやしたんどすか」

「芙チャンには叱られたかどうかからへん、でもお光を呼びなされていわれて芙チャンこわかった」

「そうどすか、そらびつくりおしやしたろな、もう大事おへん、外に遊びにおいでやすお光があんじようしますよつて、嬢さんもう庭で遊んでおいでやす」

私は勿論<sup>ほっ</sup>沸として庭へ出て、何処かの木の上に兄がいる筈なので探すことにする。それにしてもあのお婆さまってこわいなと思う。お兼のお婆のいう通り本当にお母さんのお母さんなのかしら？ 何でも教えてくれる兄に早く本当のこと聞き度い。私は草履を履き兄の居りそうな棕の樹の上を見上げる。案の定兄はかなり高い枝に跨がり、木の実を口に抛り込んでいる。

「お兄ちゃん、私も上に行きたい」

「よっしや、今迎えに行くゾ」

兄はスルスルと降りてくると私の下に廻り手早くお尻を持ち上げてこの枝その枝と私の持つ枝を指示しながら、押上げてくれるので瞬く間に私も樹上の人となりうれしくて耐らない。

「ね、お兄ちゃん、お婆さまって怖い人なの」  
「大したことないや、此処にいればいくらお婆さまだって登れないから安心だよ。お前手が届かんから実取るなよ、兄ちゃんが取って渡してやるから一寸まっておれ」

「ウン」

兄はスルスル駆け登り瞬く間に手に一杯の実を採って私のエプロンのポケットに入れてくれる艶やかに柔らかく甘い棕の実を頬張り何となく何時もの日に帰ったような一種の安らぎを感じた。

「ね、お兄ちゃん、お婆さまは何時まで此処にお泊りなの」

兄は少し考えていたが暫くするとニコツと微笑み

「きつと十日程だろう、十日程っていうのはね芙子、お前が十辺ほど寝れば過ぎるンだよ」

「そしたらすぐだネお兄ちゃん」

「そうだなー、芙子は昼寝するからまあ大

分長い間だろ」

私は毎日一度や二度はお光のお婆あのお  
嚟を聞いていると眠つてしまう習慣がある。  
のでその間に帰られるかもしれないと思うと、  
少し安心のような、もつと居て欲しいような気がす  
る。

「薫、薫や、そのような高い所へ妹を上げて、  
落ちては怪我するからもう下りなされ、そな  
たは年も上、男の子でもあるのじゃから木登  
りは平気でも、芙子はまだ五歳余りの女の子  
じゃ、危ないからもう降りてきなされ」

私はビクツとして兄を見上げる。

「お兄ちゃん降りなされつてお祖母さまが言  
われたよ」

「わかつてる、すぐ降りるからお前はそこ動  
くなよ、じつとしておれよ」

「だってえ、お祖母様の言われることはちや  
んと守らないといけないって、お光のお婆あが  
いうたでしょ」

「わかつてる、だけど余り気にするな、僕は  
木登りの達人だ、落ちたりするものか。お前  
はそこから兄ちゃんが教えたとおり出っ張りに  
足掛けて下に降りろ、そして暫く下で待つ  
ていろ、兄チャンが一杯実を取って持ってい



てやるからな」

「ウン」

私は素直に点頭うなずきソロソロと出ツ張りを指先で探し乍ら下へ降りる。縁側の陽の当る処に母と祖母が並んで坐りながらお兼婆の給仕でお茶を飲んでいるのを見下げ、お婆さまの横顔が母とよく似ているのでびっくりする。

「お母さんとお婆さま同じ顔に見える」

「馬鹿お言いでない、親子じゃから似るのは当たり前、六歳にもなつてそのような愚なことはいいなさるな」

「だつてえ」

「オーイ兄チャン箆降ろすからな君は小さくて重くて持てないからお光とお兼婆を呼んでお出で。そうさ、二つの箆に一杯あるんだ」  
私は何とも面白くなつて台所にいた二人のお婆を大声で呼ぶ。

「お光とお兼のお婆早く来て、お兄チャン椀の実箆に二杯も採つたので降ろすから手伝いしてつてよ」

「へーエ、そりや偉いこつてすがナ、落ちたら怪我するさかいすぐ行きまっせ」二人のお婆は大箆を持って木の下にやって来た。

「僕二つとも紐で釣るすから二人でうまく受けくれよ」

「へエー、そやけど坊っちゃん一つづつゆつくり降ろしてくれやつしや」

「解ってるって滾さんよううまく受取れよ」

「へエー大事オヘン、案定取りまつせ」

母も祖母もいったい何事かという風に、奥の仏壇の間から出て来て木を見上げる。

「薫は何時もあるような危ない樹上りをするのかい」

祖母が聞くといつも嬢さん連れておあがりですせ、とお兼婆がいらぬことをいう。

祖母は母を振返り

「枝が折れゝば大騒動ぢや。秀子さんしっかり監督せにや大怪我の元になりますよ」

そんな祖母の話は私は何だかおかしい。

「だってお兄ちゃんはお友達四五人と時には私も連れてこの東福寺の本堂の屋根の上でしよつ中鬼ごっこしてるんだもん」

「秀子さん、芙美子はこんなこと言ってるが、其方は知らぬのかえ」

「まあ、私は小学校にお勤めしていますもの、静馬さんが亡くなってから給料も入らな

いし、少佐っていつでも遺族年金というか扶助料というもんですか少ないものですから、お勤めでもしなくちゃ、女中もいることだし大変なの、あき子も暫くで女学校に入れなければなりませんから」

「そうだね、女子の細腕では何かとやり繰りは大変じゃ、ババも多少のものは持つておるが病気でもすれば幾いくばく何かのものも必要じゃしするから何とか遣り繰りすればやっていけようというものじゃ、秀子、其方そなた二人も女中はいらん。私が来たからには一人帰しなされ。そうじゃお光よりお兼の方がよう働くようじやから、お光はまだ若過ぎる、早速にも家に帰しなされよ」

「はい母上様がそうお思いならそのように致します」  
(つづく)

記憶のある裡に

大正時代の或る子供の生活（中）

安溪芙美子

前回のあらすじ。大正一〇年、二歳と三ヶ月で父をなくした芙美子は、兄の薫とともに、木に登ったりお寺の大屋根の上で鬼ごっこをするような暮らしをしていました。そこに、芙美子の母秀子の母であるヨネがやってきます。その人は毛利家の家老の娘で武道の達人でした。（芙美子の次男・安溪遊地）

## 祖母との日々

子供心にも二人の話す意味はすぐ理解でき、今度は若いお光が多吉のように家に帰されると思うと、悲しくなってしまう。泣いた。

「芙美子さんや、其方何故泣く<sup>そなた</sup>のじゃ。お

光は帰しても婆々がいるから心配はいらぬのじゃ。お光は若すぎて余り役立たぬ、五歳にもなればその位はわからねばいけん、士の子はそのくらいのことと泣いてはいけんのじゃ。私の傍においでなされ」

私は母を見上げどうしようかと戸惑う。

「お婆さまに逆らうことはなりません。さ、傍に行きなさい」

母に促され私はしぶしぶ祖母の傍に寄る。

「そなたは父親に死なれても余り泣きもせず聞き分けのよい気丈な子じゃ、これから婆々様が其方に武道を少し教え姉に優る子供に育てよう」

頭を撫でる祖母の手の暖かさで何となく気がほぐれたのだろう。私は暖かい祖母の手を両手で挟みお婆様を見上げ笑顔になった。

「お、其方は人見知りをせぬ良い子じゃ、これから婆々さまと寝ようぞ、おわかりか」

「ハイ、今日からお婆様の傍で寝ます。お婆様芙ちゃんにお話しして下さい」

「よしよし、お話はいくらもしてとらせよう。だが自分のことをチャンづけでいうてはならぬぞ、目上にものをいう時はもっと遜（りくた）って、

私わたくしといわねばならぬ、おわかりか」

「ハイ、わかりました」

「よしよし、秀子やこの子は存外聞き分けがよい、もっとお転婆かと思うたが存外じゃ」

私は自分が賞められているのは解ったが、祖母の言葉遣いが普通の女の人と違って、何かしら大人の男の人が遣う言葉のように思えて、不思議だった。

祖母が立去ったあと母に祖母の言葉遣いに就いて尋ねてみたがその訳はよく分かった。

「祖母は毛利藩の士しの娘で幼い時から家老の娘で上にも下にも男兄弟が居て、其頃の武家の習慣として剣道とか武道を幼い頃から習い、祖母はどの兄弟よりも熱心に習い兄や弟を凌ぐ力量にその父親に“この子が男ならどれ程安心かわからぬ”と嘆かせたとのことで、そのせいで今でも普通の男より強いのだから家うちみたいに女子供ばかりの家が気になつて来て下さったの」

私の頭を撫で乍らの母の言葉に私はすっかり満足して、何かしら気分がホッとするのだった。というのは恰度ちやうどその頃あちこちの家に

良く泥棒が這入り子供心に、夜が不安だったせいである。

「ね、お母さん、もし泥棒が家に来てもお祖母様がいらっしゃれば大丈夫なの」

「そうですよ、どんな男が這入って来ても一度お婆様に掴まると身動きできなくなるから、芙チャン、今日からもう心配しないでお祖母様の傍で休みなさいよ」

母にそういわれると子供心に感じていた一種の不安がすーうーと消えるのを覚える。

私は何となく嬉しくなつて、まだ棕の樹上にいる兄に母から聞いたことが伝え度くなり、祖母と母に一礼して外へ出た。

「おい芙公、何よろんでニコニコしてる」

「ね、お兄ちゃんもう降りて来て、いゝこと教えて上げるよ」

「フンお前のいゝことって陣取り遊びだろ」

「違うよ、もっとずっといいこと、お兄ちゃんびっくりするいいこと、私うれしくつて、今日は一杯眠るんだからあ」

「ふん、寝ながら団子でも喰ったか、馬鹿な子じゃ」

「違うってばあ、お兄ちゃんもお姉さんも腰抜かしてひっくり返る、いゝお話お母さん

に聞いちゃったんだもん、教えてほしくないの」

「お前の話なんてしれてらあ、せいぜいお母さんに浦島太郎のお話でも聞いたんだろ、そんなことなら俺の方が山程知ってるよ」

「違うってばあ、もっともつと凄いいこと、でももう教えて上げないよう、お姉さんだけに教えて上げるもーん」

「そうかい、勝手にしろ、姉さんなんて未だ未だ帰ってこないようだ、口惜しけりやもう一度登ってこい」

「いや、お婆様が六つの女の子は木登りするのはいケンって仰言ったからもう登らないようだ」

「勝手にしろチンピラ。あ、面白いもの見つけたあ」

兄は私の気を引くように大枝の股に腰を降りし手を翳<sup>かざ</sup>して何かを見ている。それが私を引きつける兄の常套手段なの迅づくに承知している私は樹から離れて、又お婆様の傍に行く。

「薫はまだ木の上かい」

「はい」

「あのこは勉強しないのかね」



「夜お姉さんに教えてもらっているようです」

「そうかい、お姉さんは女学校で忙しいのに」

「お姉さんネ、とつても絵がお上手なので  
今皇后陛下にケンジョウウする絵を描いていら  
っしゃるって、お光のお婆あが言っていました」

「そうかい、あれも絵が巧いのかね。秀子さ  
ん、つまりそなたの母親のことだがね、あれも  
昔から絵がうまかったのだよ。六条から府立  
第一高女へ通っている時も、毎日絵を描くの  
に追われて遅く帰ったものじゃ」

こういう話になると私には余り解らない。  
それよりお祖母様は一体何処からお出でに  
なつた人か、そして毎日何をしてこられたの  
か誰も教えてくれないのが子供心に何となく  
すつきりしない。自分で尋ねてみたいのだが  
「いらざることを聞くものでない」

と、祖母に叱られそうに黙っていた。その内  
お兄チャンが教えてくれるだろう。

祖母持参のお菓子を貰って口にすると今ま  
で味わったことのない不思議な少しねばっこ  
いお菓子。

「芙美子さんや、そうムチャムチャと頬張つ  
て食べるのは品が悪い、口を閉じゆつくり嚙  
んで召しなされ」

早速祖母に注意され、「ハイ」と返事しながら祖母を見上げる。祖母は一枚のお菓子を小さく千切り一ひらずつ丁寧に口の中に入れ、音もさせず、静かにお茶と共に飲み込まれるようで、私はただぼんやり見上げるばかりである。

「芙さんや、このお菓子はのう、松風というて御殿の方々のお召しになるお菓子じゃぞよ」  
「????」

私は返事もせず、なんとなく齒の裏に粘りつくような味わいを鬱陶しく思い傍のお茶で流し込むと、

「お婆様御馳走様、芙チャンお兄ちゃん探してくる」といった。

「そうかい、薫は木から降りて何処へ行ったのかね」

「解りません、でもきつと緑葉谷でお魚釣りと思うけど」

「あれは勉強もせず木登りやら魚釣りなどにうつつを抜かしていて、頼りない惣領じゃの」

「母上様、あのこは父親が亡くなってから学校へも余り行きたがらず一日中木登り川遊び時には倉から色々持ち出して、皆川へ捨

てゝくるので、お光もお兼も探し物に難儀しております。母上様少し折檻してくださいな」  
「左様か、もう其方の手に合わぬようになり  
ましたか」

「はいどうしようもなく困り果てゝおります」  
「お前さんの手に合わぬのじゃな。よろしい、婆々が言うて聞かせよう。反抗しても私には勝てぬのじゃ。案じ召されるな」

「はい、母上様にお任せすれば学校へ行く  
やもしれませぬ。お願い申上げます」

祖母は返事もせず手にした煙管を勢い良く吐月峰に二三度叩きつけられた。私は何となく兄の身の上が不安になった。

母や祖母の前から立ち上がり、兄が何処行つたか庭伝いに谷へ降り　「お兄ちゃん」と  
大声で呼ぶ。

兄は可成り奥深い川上でパンツ一枚になつて川の中を右往左往していた。

「お兄チャン、お兄チャン魚取れたの」と、呼びかける。

「あゝ、その馬穴バケツ覗いて見いよ。四匹も泳いでるよ」

私は何となく嬉しくなつて馬穴を覗く、本当

だ、大きなのが二匹、小さいのが二匹、皆元氣よく泳いでいる。

「お兄ちゃん、沢山授ったね、でも逃がすのでしょ」

「馬鹿云え、焼いてお祖母さまにあげるよ」  
「いやだあ、お魚さんかわいそうだよ」

私はもう泣声。何時も逃がしてやる兄が今日に限って、どうして焼くなんていうのかわからない。

「せっかく泳いでるのに焼いちゃ可哀想だよ、お兄ちゃん逃がしてやって」

「駄目だ、ほらもう二匹捕まえた。オイ芙美公バケツ持ってきて来い」

私はバケツを掴むと持ち上げ、水無川の流れて全部流した。

「こらチビ、何するんじゃ」

兄は小川から飛び出すと私を思切り川へ突き飛ばす。私は前後不覚の怒りのため、耳も張り裂ける程の大声で泣き喚いた。

「うるさい、泣くな」兄も大声で喚く。

「嫌だー、お魚さん焼くのいやだ、せっかく泳いでたのにお兄ちゃんに掴まるのも可哀想なのに焼いて食べられたら、お魚さん死んじやうよう、イヤダー、イヤダー」

こうして一旦泣き喚くと、甲高い私の声は谷の奥から上の寺まで響き渡ってしまうのだった。見るうちに僧堂のお坊さんが四五人バラバラと川のほとりに降りてくる。

「こら小僧、ここで魚捕るなといつもいってるだろ」

「捕っても逃がしてやるからいいのん違うの」

「そんじや何故妹が泣いてるのだ」

「そんなこと知るかい。此奴は何時も泣くんだよう」

「うそだ。和尚さんお兄ちゃん、いつもお兄ちゃんお魚さん逃がすのに今日は焼いてお祖母さまに上げるっていったの。だから芙チャンお魚さん逃がして上げた。そしたらお兄チャン怒ったから芙チャン泣いたの」

「そうかそうか、そりやお兄チャンが悪いぞ、この谷の魚は全部仏さまの生代りだよ、小僧、お前たゞ取って面白がつてるだけで、いつも逃がしてたやないか」

「婆々様だって、そんな人お前等の家に居たことないゾ、坊さん騙すと地獄へ真逆様に落ちて鬼に喰われんだぞう」

「和尚さん知らんだけや、今日はうちに日本で一番強いお婆様が来てんだぞ」

「何、婆々様か。あの老師様知り合いのあの婆々様か。それにしてもこの通天橋の魚は絶対誰も食うことならんだ。さあ、小僧解ったか、チビのいう方が正しいんだ、帰れ、その馬穴持つて上へいけ」

屈強の僧堂の坊さんに追い立てられやんちや盛りの兄もスゴスゴと馬穴を拘え上へ登り始める。

「芙チャン、君のお蔭でお魚さん命拾いしたネ。さ、和尚さん抱ッ子して上へつれてあげよう」

私は何となくうれしくて、暖かい坊さんの胸に抱かれて上へ登った。

「ありがとうお兄ちゃんの坊さん」

「うん、芙ちゃんはいええ子だよ、元気だせよ」

小僧の和尚さんは、橋に登ると何度も頭を撫でて僧堂の裏門に消えていった。私は何となくその和尚さんがお父さんみたいなのだと納得してほっとしながら、母の待つ龍吟庵へ戻った。

兄は祖母の前に膝を揃えて座り丁寧に頭を下げ

「遠い所をお越しになり、僕今日はお祖母様にお魚焼いて上げようと谷でお魚取ったの

に、芙子と僧堂の坊主が捨てて了いよった」

「そうかい折角の骨折りが無駄になり、そなたは口惜しかろう。然し私は川魚は好かぬから、もう殺生は止めなされ」

兄は慚然とした表情で、いきなり祖母の前にある祖母のいう「松風」と名付けられたお菓子を鷺掴みに四五枚取ると縁側から降りると

「秀坊ンチへ行つて来るう」

と駆出して了った。

「行儀の悪い小僧じゃ芙さんや、真似するでないよ」

「はい」

私は素直に云つて、兄が云う秀坊ンに会い度いなと思つた。秀坊ンというのは東福寺からは少し遠い鳥羽街道の瓦屋の子供で兄の同級生で、何時も私に白雪姫とか赤頭巾とか珍しい外国のお伽噺をしてくれる、兄よりも好きな男の子だった。芙ちゃん秀坊ンのお話聞き度いなと心底思つたが、お祖母様の少し嶮しい嶮しい表情を恐れ、ものもいわず

隠おとな和しく座っていた。

お祖母様は少し退屈されたのか、小聲で聞

いたことのない歌を口誦されている。意味も節も全くわからないが、私は膝に両手を置き黙って祖母の歌に聞き入る。何となく淋しいような悲しい気がしたが、祖母は年に合わない底力のある声で眼を閉じ自分の歌に聞き入っているような雰囲気はそれなりに感じとれて、終わるまで私は身動きもしなかった。

「芙さんや、其方は婆々様の唄をよう聞いておくれだね。これは今様という日本の昔の唄で、昔はこの唄と共に男も女も舞をしたものだよ」

祖母は軟らかな目になって、私にはなんとなく祖母が私のわからない何かを思い出しているように感じられた。何時の間にか母もお光やお兼のお婆も聞いていて、夫々に手を叩いている。

「芙さんや、お前さんも母者に唄を習うたであろう。婆々様に一度唄っておくれなされよ」

「さいやさいや。あの御隠居様うちの嬢さんは母御からいろいろ歌を習われて上手に歌えて、それに合せて踊りも自分でお作りでっせ」

「そうかや、自分でね。それは是非共、婆々様にも歌って踊っておくれなされよ。祖



母にそういわれると氣恥ずかしくもあり、でも歌わないと失礼になるような氣もし、私は思わず後に坐っている母を振替り見た。

「芙チャン、ほら此間自分で振り付けたあのリンゴの歌を踊りと一緒にお婆様に見て頂きなさい」

母にそう云われると黙っていることが、この遠くからわざわざ出て来て下さった祖母に失礼なような氣がして、恥ずかしさをこらえて歌って躍ることにする。

当時、母は毎晩私を寝かせる折り、決って「赤い鳥」という本を枕元に置き、歌を教えてくれたりお伽噺を聞かせてくれるのだった。

「お祖母様、そしたら　「赤いお家<sup>うち</sup>」の歌と芙チャン自分で作った踊りと、一諸に踊ります」

「おおそうかえ、それは可愛らしいことじゃ」祖母は優しい笑顔になって手を叩いて下さった。母もお光やお兼のお婆あも一緒になって手を叩いてくれる。私は生まれて始めて恥ずかしいという氣分を味わい乍ら、胸がドキドキした。多分それが私の晴れがましいとい

う経験の、最初であつたのだろう。

♪赤いお家の窓閉めて  
林檎いとしや冬簞り  
銀のお盆に載せられて  
誰が忘れた棚の隅  
お盆の上があゝの野なら  
会うた小鳥も来るであろ  
あゝ野で眺めた青空は  
二度と帰らぬ夢の国♪

「お婆様これで終い」  
「おおそうかえ、そなた上手に歌って踊つて  
おくれたよ、可愛かったよ芙さんや」

怖いと思つていた祖母の思いがけない賞め  
言葉にうれしくなつて、今度は姉に習つた難  
しい女学生の唄を歌う。

夕空晴れて秋風吹き  
月影落ちて鈴虫鳴く  
思えば似たり故郷の空  
あゝ我が父母いかに在わす

イフアボデイミタボデイ、  
カミングツルウザライ

とこれは姉の唄う英語の唄。

「そなたは却々利発な子じゃ、外国語も覚えて利発なことじゃ。サ、婆々様が褒美をとらせよう」

祖母は傍らの大きな袋の中から、紙で作った姉様人形を出して掌の上に載せて下さる。私は嬉しくて大きな声で母に見せる。

「お母さん、ホラ芙ちゃんお婆様にこんなきれいなお人形さん貰った」

母は手に取るとニッコリして祖母に向い、

「母上様何時までも御器用でうれしうございます」

「何の小さい子が珍しがって喜ぶのが私のよろこびというものじゃ」

台所の婆あ婆も皆手に取って、

「嬢さんきれいなお人形戴かれてよろしうおしたなあ」

と喜んでくれるので、私は一層嬉しくなつて思わず、

「お祖母様有難うございます」

と、いったことのない丁寧な言葉でお礼をい

う。

祖母は優しい目になって私の頭を撫で

「其方は利発な子じゃ、今日はババサマと一緒に寝ようぞ。面白い話もして進ぜよう」

と、いわれ、私としてはやっぱりお母さんと寝たいのだけれど、それではせつかく寝ようといつてくれた祖母に悪いと思い

「お婆様お話ししてネ」

と言ってみる。

「何のお話でもして進ぜよう」

「ヤーイ芙子ばかりチャホヤされていゝのう、僕だってお婆様と一緒に寝るよう」

半分眠りかけていた兄が突然起きて

「お婆さん僕と寝ようよ」

と、傍に寄ってきた。

「馬鹿お言いでないぞよ薰、そなたはこの家でただ一人の男であろうが。盗人の忍び込む時もあるぞ。玄関の間でしつかり張番するのが男の勤めであることを忘れるでないぞ」

「そんなこといっても僕まだ子供だよ」

「もう子供ではありはせん。四年生といえは立派に男としての勤めは出来るのじゃ。それをまあそなたは木登りや魚取りをして僧堂の和尚に叱られたというではないか、亡くなつ

た父親の代りをせねばいけないのじゃ。おわかりかえ、もうそつと大人になりなされ」

「いやじゃ、僕まだ子供ダーイ。お父さんの代りなんて出来るはずないよう、僕婆々さん嫌いだーい、もう寝るわい」

兄はそういうと祖母に向かって赤ンベーをして奥の部屋へ消える。

「母上様、何卒お許しを。あの子は腕白で困ります」

「何、よいよい。今に大人になるであろ、其方も大変であろうが頑張りなされや」

(つづく)

記憶のある裡に

大正時代の或る子供の生活（下）

安溪芙美子

前回までのあらすじ。京都のお寺で暮らすお転婆な六歳の少女芙美子の家に毛利家の家老の娘で武道の達人である祖母がやってきます。芙美子はきびしい中にも案外やさしい婆々様とともに寝るのですが……。安溪遊地の母の絶筆完結です。（安溪遊地）

### 日本一強い婆々様

何時の間にか婆や達も姉や母も部屋から消え私はお婆様と二人だけになり気が付くと布団の中だった。それからどれほどの時間が立ったのだろう。私はオシッコがしたくなり目覚めた。枕元には灯心の燃えるあんどん

の光で周囲が明るい、一人ではお便所に行けないので、何と無く目を開いて辺りをそれとなく見廻す。

すると何か動いている。あんだんの光で見るともなく見ていると、影は見たことのない男の影である。私は恐ろしくなり、あれが泥棒という者ではないかと、とっさに思う。

「お婆様、お婆様泥棒がいる。芙チャンこわい、お婆様おきて頂戴」

私は思わず、大きな声になった。

「何じゃチビとババアか」

男は私の傍によると頬を撫でる。

「お婆様いやだあ、泥棒が撫でたよう」

絶叫に近い子どもの声は一辺に家中を起こしたようだ。瞬く間に家中のあかりがつき母も姉も兄も私と祖母の部屋にやって来たが、「ヤーイ、泥棒がお婆様の膝の下で泡吹いてるよう」

兄の大声におどろいて隣に寝ている筈の祖母をみると、祖母は泥棒を押さえつけ、

「秀子さん丈夫な紐を持ってきなされ。身動きできないよう縛りつける程に」

と、ニコニコ笑っている。泥棒は苦しそうに

みぞおち  
鳩尾を

手で押さえながら、

「クソババアとガキだと思つたのに、なんちち  
ゆうこつちゃ」

とぼやいている。

「タダのババと思つたがそちの失敗じゃ、ワ  
シの武術で死ぬものを居るのぢや、ひと様の  
ものを夜に盗もうとする悪党には当然の報い  
ぢや、もう一発喰らわせてつかわそうか」

祖母が少し身動きすると、泥棒はペシャンコ  
の姿になり、

「もう悪いことは致しまへん、へえ何卒堪  
忍しとくれやす、ワシ息も出来まへん、もう  
悪いことしまへん、へえ何卒堪忍しとくれや  
す」

子どもの私が見ても一寸可愛想な程泥棒  
は青い顔を畳にすりつけ、お腹を痛そうに  
押さえつけ、涙を流している。

「其方ごとき悪者には容赦せぬが婆々の武  
道じや。三人や五人が掛つて来ようともび  
くともせぬのが毛利家の武道というものじゃ。  
まだ生かしてとらせただけ有難いと思わつし  
やれ。婆々と子供と侮つたが其方の地獄じ  
や。痛かろう。二度とこのような悪さをする



でないぞ。世の中には未だ未だ強い婆様が一杯おるぞよ」

「へえ、もう二度と悪さは致しまへん。けどこんな強い婆様に会うたは初めてじゃ」

「馬鹿いうな、我等年寄りはその方らと違い皆武道の心得があるのじゃ、性懲りものう悪さをすれば何れ其方の命はなくなるのじゃ。わかりたか」

「へえ、もう肝に命じてわかりました」

艶のある泥棒の額を祖母は二本の指でチョイと押したが、彼は「痛々々」と大声と共に涙をポロポロ零し、子供心にも一寸この弱い泥棒が可愛想だった。

「オッチャン、お婆様の強いこと知らんかったの。お祖母様日本で一番強い人だったのに、そんなところへ泥棒に来たから罰当たたんや」

「さいでおます。さいでござります、へえ。こんな強い婆さまに会うたは始めてでござります、へえ」

と、ヘコヘコ頭を下げていると、姉たちが呼びに行ったお巡りさんが三人も来て、

「こら正こう、又お前か。今度の懲役は長いぞ。ここの御隠居には一ころやろ。ざま見

ろ世の中なめとるから罰ばちじや」

正公といわれた泥棒は鼻水をすすり乍ら、  
「へえ強い御隠居様、もう泥棒は懲り懲りです。今度出てきたらマトモに働き御挨拶に参じますでございます。へエ」

「まさ、お前その言葉忘れるなよ」

お巡りさんの一人が祖母の前にやつてきて、  
「御隠居さんは相変わらずお達者で結構でございますなあ。一度我々にもその毛利家の武道というものを教えて貰い度いもんですなあ」

「何をお云いやす、埒らちもない泥棒じゃから簡単に済んだだけの事で、貴方達専門の方々にお教えられるようなもんではありませんよ」  
余り解らない大人の言葉に退屈して、私はお光のお婆あにトイレに連れてもらい、すぐ又寝て了った。

お婆様はそれから四五日も家に逗留され、私は今様という昔の唄を幾度も祖母に習ったり、お婆様の子供時代の毛利家の御殿の話など聞いて感心したり、大変だったのだなあと驚いたりして、毎日朝が待たれるような日を過ごした。

沢山聞いたお話の中で今でも鮮明に耳に残り、昔がどんなに厳しい生活だったか、今の方がずっと楽だったと思ったことが、未だ忘れられずはつきり覚えている。二つほど今も心に残り続けるものを書いておこう。

祖母の家は毛利の次席家老というものであったらしく、一番心に残ることは次の様な話。

或日、祖母が庭に面した小部屋でお習字をしていると、突然庭でバシッという鋭い音が聞こえ、思わず立ち上がり障子を明けてみると、寅次といわれていた中間の首がころりと庭の苔の上に転がり、父親が刀の拔身を右手に下げ「見るでない！」と怒声をあげたので祖母は驚き一散馳けて台所に行き、泣き乍ら母に縋りつくくと、母親は優しく祖母の背を撫で「理助は打首にされたのであろう」といわれた。お婆様は打たれたのが理助か正衛門か見分ける暇もなく馳け込んだので、母親への返事は出来なかったとの事である。後々の話であるが理助という中間は父の氣に入りだったが、幾度も金銭を誤魔化し、その上女中を手当り次第孕ませる悪党だったので、祖母の父親の勘気に触れ、打ち首にされたとの事だった。

何故稚い私がそんな話を知っているのか、

と人は不思議に思うだろうが、祖母がいきなりそのような荒っぽい話をする筈もなく、実は泥棒が入った日の翌日の夕方、私は祖母と二人でお風呂に入り、何時もやるように濡れ手拭いの端をもつて、水を取る為に力一杯振り下ろしたその音が、祖母に幼いころの手打ちの音を思い出させた事を知り、私はもう二度と、手拭いの端をもつて水気を取ることは、止めようと決心したものだった。

実際その話は六つの子供には余りにも強烈すぎ、その中間は何をして打首にされたのか、長い間私の心にかゝる話であつた。大きくなってからは昔の日本の武士階級は想像を絶する荒ッポイ生活をしていたのだとよく思ったものである。その時以来今に至るまで私は濡れた手拭い様の布の端を持っていただくようなことは出来ないでいる。

翌日祖母は私達の家から何処かへお帰りになつた。

「お祖母様は何処へ行かれたの」  
私に優しくかった祖母を思い出し、お光に尋ねる。

「へえ、嬢さんはご存知やおへんのやネ、此処からずっと西の方に、六条というところがおま

してな、そこには本願寺さんという大きなお寺がおますのでっせ、嬢さんのお爺さんはその大きなお寺の偉い和尚さんやったそうでっせ」

「この東福寺より大きいの？」

「そりや嬢さん何倍もおますえ」

「へえ、そんな大きなお寺にお婆様お帰りになるの」

「滅相もない、御隠居様はそのお寺の近く  
のシモタヤで、お一人で住んどいやすという  
ことでっせ」

「シモタヤって何？」

「小じんまりした家いうことでっせ」

「だったらお婆様お一人で淋しいのと違うの」

「そらお淋しうございますやろ、でもどう  
しても本願寺さんの傍から離れとうないとい  
うておいやしたでっせ」

「??」

お光の話は私の想像をかきたてるけれど、余  
りはつきり解らない。

「とうさん、今にもっと大きうおなりやし  
たら皆おわかりになりますさかい、もう一寸  
我慢おしやすや」

「はい」

私はあっさりあきらめて、お八ツを貰い近所にいる同年の男の子の家へ、遊びに出かけた。

入江のケンチャンは、恰度私のところへ遊びに来る途中でうまく会えたので、手を握り合つて二人共ピョンピョン飛んでよろんでいたから、東福寺の本堂を再建している大工のよっちゃんが、

「あんた達綺麗な木の削ったもの一杯残してあるからあれ繋いでいろんな遊びが出来るよ、欲しいだけ持つて行き」

よっちゃんにいわれ、二人で抱えられるだけの広い鉋屑を集めて、家へ持つて行つた。

「まあまあ嬢さん、迎山そんなもんどうおしやす、火の傍へ持つてきてはあきまへんで」

「はい、わかつてる。私たちこれ体に巻いて縁側から飛び降りるの、したらファツとして天から飛んだみたいになるの」

「さいでおますか、小さい子達は何ででもお遊びやすのやなあ」

「僕一番縁側から飛び降りる」

ケンチャンが体中に一杯巻きつけて、

「さあ飛ぶよ」

といった。私も体に巻いてみたけれど、ガサガサしてとても飛降りなんて出来そうもない。

「私怖いからやーめた」

「何だ芙チャン、弱虫だナー」

「いいもん、怪我したらお祖母様心配されるから、ケンチャン矢張りこれ工事場へ返しに行こう」

「ウン、けどお婆様って、芙ちゃんちにそんな人いなかったけどなー」

「私たちがお喋りしている裡に何時の間にか、お婆様が縁側に出ておられて、

「そなたケンチャンという名前かえ、私が芙チャンの婆々様じゃ、これから幾度もここへ尋ねてくるから、よう覚えときなされよ」

「へー、でも僕ンチの婆チャンと比べると言葉がおかしいな、婆チャン遠いところから来たの？」

「そうじゃの、余り遠くはない、ほんの近く、六条から来ましたのじゃ」

「お婆チャンの言葉一寸おかしいよ」

「そうである。婆々様は山口という遠い所の生まれじゃから、京言葉には余り馴染まんのじゃ」

「ヤーイ、この婆チャン自分の事、婆々様いうてる僕とこの婆チャン、自分の事 あていうよ」

「そうかいの。日本も広いから、色んな言葉があるのじゃよ。自分の事をわたくしというかと思えば、京言葉のようにあてとも、田舎ではわしともいう。まあ言葉というものは土地によつて、色々あるということも坊ちゃんも芙さんも覚えておきなされ、おわかりたか」

ケン坊は舌を出して、「おわかりたようだというのが私は何となく腹が立ち、

「ケン坊嫌い、もう遊ばないようだ。お婆様つてとても強くて、昨日の夜家へ来た泥棒なんかすぐペシヤンコになつて、お巡りさんに渡されたもーん」

するとケン坊は、一寸口惜しそうな目になつて、

「お婆さんつて何処でも強いようだ、僕とこのお婆さんでも大工の棟梁叱りつけてるよう」

「棟梁つて、芙チャンわからへん」

「ヤーイ、芙チャン僕と同じ年なのに、棟梁知らんのつて、芙チャン余り賢くないよ」

私はとても腹が立ち、もう賢坊とは一生遊ばないでいようと心に決める。

「まあまあ嬢さんと賢坊、そんなところで口



争いせんと、このお八ツ持つて仲ようおあがりやす。と、お光のお婆あが、小餅にうつすら醤油をつけ焼いたものと、餅を持ってきてくれた。所が今まで奥の間に座っていた祖母の姿が何時の間にか消えている。私は瞬間、体がゾクツとして、思わず大声で泣き出した。

「お兼のお婆あ、お婆様が消えてしまわれたあ。お婆あ探してきてえ」

私の声は子供と思えないほど、甲高く、台所では大変だったらしい。というのは祖母が私に黙って、六条へ帰るからと、台所に言い含めたらしいのを、敏感な私は察知できたので、それ以後は黙ってケン坊ンチへ遊びに行った。祖母はもうこの家に居ないと思うと、体の何処かが何となく軽くなつたように感じたのは、それなりに祖母の存在が重圧だったのだろう。その日は、母や姉や兄も女中達も、何となくホツとした雰囲気で、私は早くから母の傍で寝入ったとのことだった。

## 五、環境の変化Ⅱ十四人家族

祖母が六条へ帰ってから、怖い者無しとなつた兄は、すっかり学校に行かなくなり、終

日近くの山とか、醍醐の山辺りまで遠征して、遊び暮らすようになった。

母が毎日泣かんばかりに学校へ行かせようと、自分と一緒に出かけるよう説得しても、兄は頑として、登校を拒否し続けるばかりで、母に隠れてすぐ裏山へ消えて了う。子供心にも母の心配が気になり、私も必死の思いで兄の姿を追い求め、裏山や東山連峰を、泣き乍らついて歩いた。流石に兄も私をほっておくことはせず、危ない所は手をひいたり、オンブしてくれたりで見放すことはなかった。私も少しずつ成長して、きつと兄には、学校へ行きたくない理由<sup>わけ</sup>があると思うようになり、

「お兄ちゃん、どうして学校へ行けなくなつたの」

と、執拗に尋ねずにおられない。

母親が学校から帰ると、それとなく兄の姿を追い求め泪ぐむ姿が、私には耐えられなくなっていた。

「ね、お兄ちゃんどうして学校へ行かないの」  
私は間がな隙がな同じことをいうもので、  
流石にうるさくなつたのか、

「どうして行かないのか、お前にだけ教えて

やるよ」

といって話してくれた。それに依ると、兄は担任の先生に職員室へ行つて、名簿を持ってくるようお願いされたのだが、どうしても先生ばかりのいる、その部屋へ行くのがイヤだった。それで「はい」と返事をしてそのまま家へ逃げ帰り、それ以来学校へ行けなくなった、とのことだった。

「でもお兄チャン、お母さん毎日泣いて、学校へ行こう」つていわれるのに、お母さん可哀そうだもん、そのショクインシツつて、何か恐ろしいところなのお兄チャン、

「別に恐ろしくないけど、僕もう十日も休んでるし、絶対いけないヨ」

「でもお母さん、同じ学校へ行つておられるし、お兄チャン行かないとお母さん、校長先生って怖い先生に叱られるのだって、お姉さんいわれたよ」

「でも僕、職員室入れないよ。もう」

そういわれると、五歳余りの私には、そのショクインシツという所が、逆とても恐ろしい所のように思えて、余り兄をなじるのも気の毒だと思つて、それはそのまゝ気にならなくなった。

それから五日ほど経ったある日、私と兄が秀坊ンチから家に帰ったら、又お婆様が座敷に坐っておられる。私は思わずギクツとして、突っ立ったまま、ポカンとした。見たことのない大きな男の人が、祖母の前に坐りニツコリ笑顔になって、

「芙美チャンダネ？」と言った。

「ハイ、でも私小父さん知りません」

私はそういうなりお婆様の顔も見ず、その大きな男の人の後に廻り、頭や肩を両手で叩いた。

「これ……何という行儀の悪い。許しませんゾ」

という激しい祖母の叱責の声にもめげず、部屋を飛び出し、縁側に立っている兄の傍によると、思わず知らず大声になって、

「イヤダー、お兄チャンあの小父さんイヤダー、お兄チャン山連れてって、イヤダー」

私の甲高い声は家中に響き渡り、台所の婆あば等も慌てて駆けつけ、むずかる私を扱いかねていた。

泣くだけ泣き喚いた後は、多分又兄と一緒に通天橋を渡って、何処かへいったのだらう。

今になって思うと、それは私の体に流れる、  
実父の血の怒りであつたのかもしれない様な、  
気がしている。

そこに座っていたのは、後に私達の養父となる人だったから、何も知らなくても私に流れる血が、母を取られると本能的に感知したのだろうと思うようになったのは、それから七八年経ってからだった。

### 三、それから後

母は登校拒否の兄の処遇に悩んだ揚げ句、  
祖母のすゝめもあり、再婚したのだらうと思う。

私が会うなり、頭や肩を力一杯何とも解らない意志のようなものにそそのかされて、叩きまくった男の人達と、共同生活をするようになったのは、それから一年程後のことだった。

トラック三台に荷物や道具を積み込んで、  
京都市内からは少し離れた、畑や竹藪もあり、周囲には有名な寺院などもあちこちにあり、閑散な場所に移ったのは、半年程後だった。

た。

勿論、義父となった人には子供がいる訳だし、私達も三人姉兄妹だし、始めて会った時私もやっと七歳となり、次の年には小学校へ行く年で、幾らかは大人たちの、苦慮もわかるようになっていた。

向こうには女姉妹が三人と、男子が一人で両方合わせると、男子二人女子五人となる上に、行く先のないうちの婆や達を合せて、十四人の大家族である。周囲に余り家のない、どちらかといえれば少し辺鄙な田舎が、かえって広々とした感じで、子供たちの遊ぶには好都合だった。

向こうの家にはお母さんが亡くなってお父さんだけ、こちらの家はお父さんが亡くなってお母さんだけという欠落家族同志は、どちらも欠けた人が満たされて雰囲気としては、そうチグハグな感じはしなかったのだろう。たゞ問題は、私だったような気がする。私の脳裏にはどうしても、ピンと髯の立派だった父親の死顔が脳裏に残り、私に優しく接してくれる、義理の父に親しめない所があったが、この義父は私が本を読むのが好きな子だ、と思っただけで、次々と子供向きの本を買ってく

れた。同年の緑ちゃんという女の子は、只管母ひたすらの傍にくつついて、お母さんお母さんと寧日もなく、私は向うの上から二番目の　「まあさん」という女学校へ通うお姉さんが大好きで、何でも教えて貰って、もう兄とお話もしなくなっていた。兄も既に中学生となり登校拒否もなく、順調な暮しだったと思う。時には近所の小母さん達が、寄合所帯だなど蔭口をいうこともあつたらしいが、我家の中は何時も、和氣藹々としていた。

私達子供は大した抵抗もなく、義理の父や母をお父さん、お母さんと呼び合い、甘えたり時には叱られたりしながら、仲良く暮らしていた。

その裡、弟も二人生まれ遂に九人の子供と、二人の女中、両親と、時に私の祖母も訪れるので、多い時は私達に従<sup>したが</sup>いてきたお光のお婆、お兼の婆共々で、十五人の大家族の家となつたが、大家族なりの秩序が出来て、大人たちは勿論、子供達にも夫々の秩序が出来て、各々夫々に自分たちの暮らしを、快く過ごすようになっていたが、十五人も一諸に暮らすということは、十五通りの生き方がある

ということだが、私達子供には毎日に様々な変化があり、例えば私と同年の緑チャンがそれまで、どれ程一諸に学校に行くよう誘っても、「一人で行く」と母の袖に縋り、ベソかいていたのが、元気良く「芙チャン早く行こう」と誘うようになったし、登校拒否の経歴をもっていた兄は、中学生になってから、すっかり快活になったばかりか、中一から抜群の運動能力を発揮し始め、体育の先生から何時か何処かで開催されるだろうオリンピックに「我が校から」と思わせるようになって、性格もすっかり快活となり、家中の人気者となっていた。

思い出に残る子供の頃の一番の楽しみは、お正月の間幾度も家中の子供達でやる、百人一首の歌留多会で小さい弟たちはさておき、私も緑ちゃんも一年生になると、二三枚のオハコという自分の好きな和歌を、兄や姉たちの持ち札でしっかり覚え、何処にあるか確認して、上の一句で何処へでも遠征して、ものに出た時の嬉しさと得意さは今も忘れられない。年上の姉や兄たちが、私や緑ちゃんに譲ってくれているのも知らず、二人ともすっかり有頂天になって、すっかり百人一首ツ子



になつて、読み手の父母にも誉められた。

七十年以上も昔のことなのに、目を閉じて思い出すと、その部屋の床の間の松竹梅等も、脳裏にしっかり映るようだ。

この盛大な大家族も、それから有為転変の数々があり、両親共々子供の成長に従い、又元通りに戻り、時世流れて七十年弱、生き残るものわずか三名、母方は私一人、父方は二人、一人は今や死の淵とか仄聞、げに人生とは斯の如く、儚きものにてありつるか。

（おわり）